

St. とは 何 か

小 澤 幸 夫

一昨年刊行されたヘルマン・ヘッセ全集第10巻で『デーミアン』を翻訳する機会に恵まれたが、その際一番頭を悩ませたのは第4章の書き出しの一文である。

“Ohne meinen Freund wiedergesehen zu haben, fuhr ich am Ende der Ferien nach St.”¹⁾

「友に再び会うことなく私は休暇の終わりにSに向かって出発した。」²⁾

翻訳に当たっては高橋健二、相良守峯、実吉捷郎の三氏による日本語訳とMichael RoloffとMichael Lebeckによる英訳を参照した。その後秋山英夫訳を入手したが、それぞれ以下のような訳になっている。

「友だちに再会せずに、私は休暇の終りに聖某市へ行った。」³⁾ (高橋)

「友に再び会うこともなしに、休暇が終るとともに聖一市へ向って出発した。」⁴⁾
(相良)

「あの友だちには、それなり二度と会わずに、ぼくは休暇が終ると、S……へ旅立った。」⁵⁾ (実吉)

「デーミアンにもう一度会うこともなく、僕は休暇の終わるころ、ザンクト・*
*市へ旅立った。」⁶⁾ (秋山)

“At the end of the holidays, and without having seen my friend again, I went to St.—.”⁷⁾ (Roloff/Lebeck)

¹ Hermann Hesse: Sämtliche Werke, Bd.3.Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt a.M.: Suhrkamp 2001, S.286.

² 『ヘルマン・ヘッセ全集』第10巻、臨川書店、2005年、57頁。

³ 『ヘッセ全集』第6巻、新潮社、1982年、54頁。

⁴ 『ヘルマン・ヘッセ全集』第6巻、三笠書房、1957年、134頁。

⁵ ヘルマン・ヘッセ『デーミアン』実吉捷郎訳、岩波文庫、2002年(第55刷、初版1959年)、93頁。

⁶ ヘルマン・ヘッセ『デーミアン』秋山英夫訳、講談社文庫、1971年、94頁

⁷ Hermann Hesse:Demian.Translated by Michael Roloff and Michael Lebeck, Perennial Classics, 1999, p.58

St.はSanktの略として用いられることが多い。これは英語のsaintにあたる。サンタ・クロースはSt.Nikolausとなる。地名にSt.がつく場合も多い。有名なオーストリアのスキー場St.AntonやスイスのSt.Moritz（サン・モリッツ）などにご存知の方も多いであろう。

一見して分かるように実吉以外は皆“St.”を「聖」の意味にとっている。筆者も実のところ最初は「聖……」と訳した。しかしよく見ると英訳と違い、原文には“St.”の後に“—”がない。ドイツ語では“st”は「シュトウ」「sp」は「シュプ」と発音するので、これらこれらは「ス」、母音の前では「ズ」と発音される“s”と区別するため、省略する時も“s”ではなく、“st.”、“sp.”とするのが普通である。例えば“St.”は“Sankt”以外にも“Stück”（…個），“Stunde”（時間）の省略形として使い、“Sp.”は“Spalte”（新聞、雑誌などの縦の欄、段）の省略形として用いる。このことを考えると“St.”は、例えばヘッセの生地Calwから近い大都市Stuttgartであってもかまわないのである。

この作品にはもう一箇所地名の省略が出てくる。

“Ein Paar Wochen später ließ ich mich auf der Universität H. einschreiben.”⁸⁾

「数週間後、私はH大学に入学の手続きをした。」⁹⁾

Hからはドイツ最古の大学があるハイデルベルクが連想されるが、別にそう限定する必要はないであろう。あえて特定しないのがこの作品の趣旨だと思うからである。

もしヘッセがSt.を「聖」の意味に限定したいと考えたのなら、St.XのようにSt.の後に何か別の頭文字をつけたであろう。こうすれば誤解の余地はないからである。

このように考えると、“St.”を「聖」と訳した場合、妙な色付けをし、読者に変な先入観を与えてしまう虞が出てくるのではないかと思われてくる。この町でシンクレアは酒を飲むことを覚え、退学直前まで行き、やがてベアトリーチェ体験を

⁸⁾ Hermann Hesse: Sämtliche Werke, Bd.3.Hrsg. von Volker Michels. Frankfurt a.M.: Suhrkamp 2001, S. 338.

⁹⁾ 『ヘルマン・ヘッセ全集』第10巻、臨川書店、2005年、112頁。

するのだから「聖……」と訳したい誘惑にも駆られるのだが、Überinterpretation（解釈のしすぎ、深読み）に陥る虞があるので、そこは読者の判断にゆだね、あえてニュートラルに“S”と訳した。“St.”としなかったのは、ドイツ語になじみのない読者にとってこのような書き方はいたずらに混乱をまねくだけだと考えたからである。

しかし自分の解釈に自信があったわけではないので、勤務先で非常勤講師としてドイツ語を担当されているネイティブのペーター・ホイサーマン（Peter Häußermann）先生に質問してみた。先生はヘッセと同郷のシュヴァーベン地方のハイルブロン出身なのでこの辺りの事情には詳しい。先生の意見では両方の解釈が可能だろうということだった。

そこでオリジナル版ヘッセ全集の編集者であるヴォルカー・ミヒェルス（Volker Michels）氏に直接問い合わせてみた。氏の回答でも両方の解釈がありうるので“St.”のままにしておいたらどうかということだったが、日本語ではそれは難しいので、結局最終的に“S”という形を選んだ。

日本語版ヘッセ全集では完全を期すため、一つの手稿に当該の巻担当の編集責任者と二人の編集委員、都合三人が目を通すことになっている。第10巻は筆者が責任者だったため二人の編集委員が目を通したが、最初にチェックした成蹊大学の里村和秋先生が早速“St.”は「聖」ではないかと指摘された。今まで述べてきたことを説明したところ、先生は知り合いのネイティブの方にも訊かれ、結局筆者の説に賛同してくださった。二人目の編集委員の先生は何もおっしゃらなかった。

だが、この判断は誤っているかもしれない。ヘッセが他の箇所でもSt.を「聖」の意味に用いている可能性も捨てきれない。この小文を読んでくださっている方で、この件についてご存知の方がいれば是非ご教授いただきたい。改版の際に（そういう機会があることを切に願う）参考にさせていただきたいと思っている。